

誰も置き去りにしない、
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために



未来 Watch

みらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティー

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

ホームページで「講演動画」公開中!

ニッケ教育研究所 ビデオギャラリー

教師の皆さまへ 模擬授業形式の特別講演

「教師の日常改革」 授業が変われば
学びが変わる!
子どもが変わる!

〈講師〉関西学院初等部 教諭 森川 正樹 先生

スマホから、ご視聴いただけます

「授業で勝負する」ためのヒントは、
子どもたちとの何気ないやりとりの中にある——
気づきを実践につなげられるお話です。ぜひ、ご覧ください!

動画の
ご視聴は
こちらから



一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけますか？
子どもたちは“未来の宝”です。私たちが発信する未来の宝を育む情報を、学校・家庭・地域で是非ご利用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記



「決断する」ということは、「一つに決めて他を断つ」ということと考えます。世の中では答えのないことは多く、対処を自分で考え、考えられるいくつかの方策から「決断する」こととなります。そのためには、現実を観察し理解すること、過去の同様な事例に当たること、ありがたい未来を想像することが必要です。自分の考えを持ち、他の人の意見を聴き、最後は自分の意志で決めるという経験を日常的にできる環境を子どもたちに準備してあげたいと思います。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長 楠本 景央

Instagram icon and QR code

FOLLOW US!

Facebook icon and QR code

特集

私がつくる子どもの笑顔 第8回

「学びに向かう力」の育成は 児童の「主体性」を引き出すことから

連載コラム 第4回

学校グランドデザイン

— 家庭と地域をつなぐ学校づくり —

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

※写真は、富良野（北海道）です

学校グランドデザイン

— 家庭と地域をつなぐ学校づくり —

《ニッケ教育研究所顧問》 **勝本 孝夫** かつもと たかお
元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）



これまで3回にわたり学校グランドデザインの考え方を話してきましたが、いよいよ今回が最終回となります。いかなる状況にも微動だにしない学校づくりのため、そして、学校が家庭と地域をつなぐキーステーションになっていくための参考にいただければと思います。



4 普遍かつ発展し続けるものとして

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」（※）とは、『方丈記』冒頭の言葉です。世の中のすべての事象は“無常である”という意味ですが、私はこの随筆を読

2つの視座（認識する時の立場）

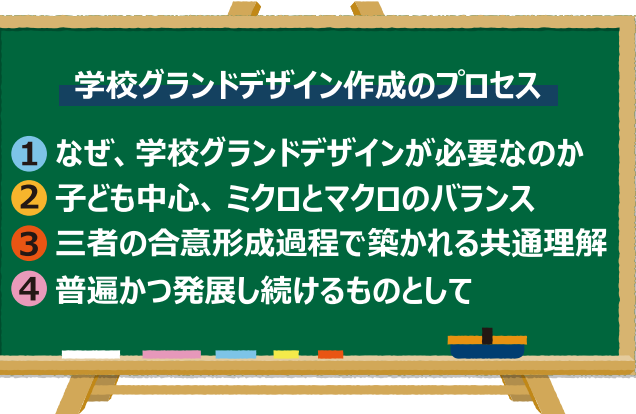
河水の流れは絶えず変化して元の形を留めないが、河それ自体は変わらずに存在し続ける——置き換えれば、学校は「河」であり、子どもは「水」です。どのような時代にあっても社会からの要請に応え、未来を担う子どもたちを陸続と輩出していく責務が学校にあると思うのです。それを果たすために、時代や人が変わっても微動だにしない“**普遍的な視座**”と、社会状況を正しく読み取って改革を行っ

3つの視点（思考する時の立脚点）

一方、子ども中心の学校づくりという観点で捉える時、3つの視点が重要と考えています。1つ目は、子ども一人ひとりをサーチライトの如く照らし、目の前の課題に取り組む**「アリの眼視点」**。2つ目は、学校をとりまく地域・諸機関との関係性にまで思い巡らせ、視野を広くして全体を俯瞰する**「鳥の眼視点」**。そして3つ目は、魚がからだ全体で潮の流れを感じて進んでいくように、予測困難な状況でも“時間の流れ”で見通していく**「魚の眼視点」**です。

学校改革プラン（学校グランドデザインの実行プラン）

私は学校グランドデザインに加え、最初に校長を務めた小学校で、「魚の眼視点」をもとにした7年間の「学校改革プラン」を策定しました。スタートから2年単位で第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期に区切っ



むたびに学校グランドデザインを作成する際の2つの視座と重なってきます。 ※「方丈記 発心集（新潮日本古典集成）」三木紀人 校注、新潮社、2016年1月発行、15頁から引用。

ていく“**発展的な視座**”の2つを併せ持った学校づくりの必要性を痛感するのです。

学校グランドデザインは教育活動の全体構想を表したのですが、未来永劫に“進化し続ける”ものとするために、2つの視座（普遍的、発展的）のバランスの中で描くことが重要です。

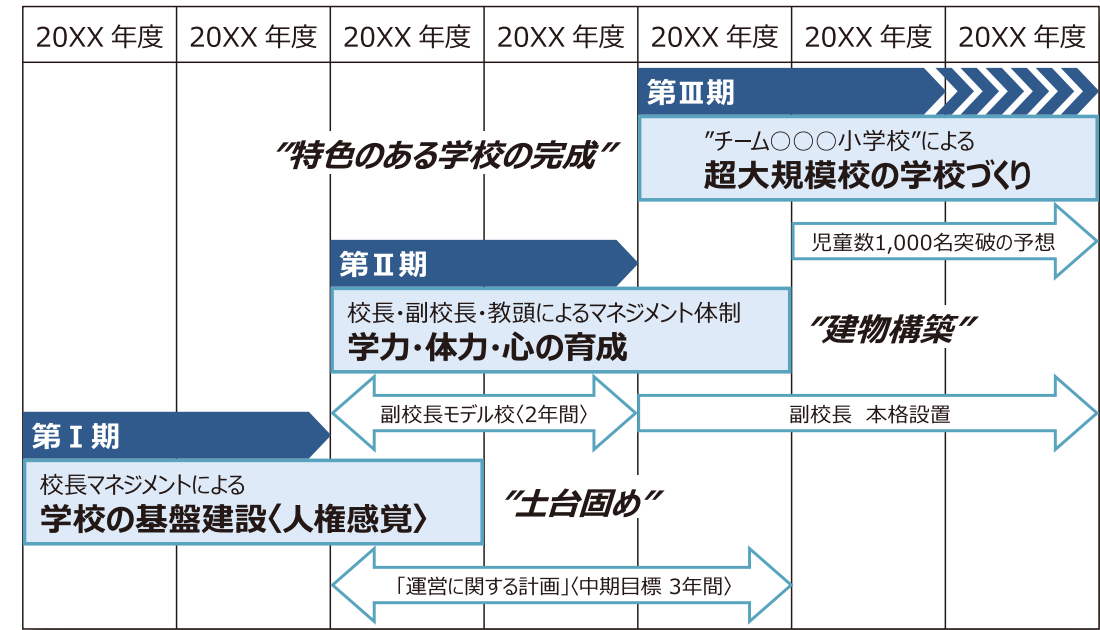


これまで紹介してきた「学校グランドデザインの作成例」（2022春号・夏号・秋号に掲載）で、中央から右向きと下向きに示した矢印は、主に「アリの眼視点」です。子どもたち一人ひとりの可能性を拓くために、押さえておくべき「学校教育の内実」に関係します。そして、中央から左向きに示した矢印は、「鳥の眼視点」です。学校と、地域をはじめとする「関係諸機関との連携」に関係します。それでは、「魚の眼視点」ではどのような展開になるのでしょうか。

ていますが、教育活動自体は3年単位としています。教育活動の終わりを次の教育活動の始まりと重なるように設定しているのは、スムーズに次期へ移行するための“のりしろ”が必要と考えたためです。

学校改革プラン（7年間）

※ 過去の作成例です（大阪市）



第Ⅰ期は、“土台固め”の期間です。教育活動テーマは「校長マネジメントによる学校の基盤建設」で、人権感覚の浸透に取り組めます。学校づくりのスタートは、人権感覚を基盤に据えるところにあります。**人権意識ではなく人権感覚こそが、学校づくりの基盤**にならなければなりません。私は、その具体的な取組として掲げるべきは「特別支援教育」の充実であると考えました。

第Ⅱ期は、人権感覚という土台の上に学校体制を築いていく“建物構築”の期間です。教育活動テーマは「管理職によるマネジメント体制」で、＜学力・体力・心の育成＞に本格的に取り組めます。その際、**授業力と学力は表裏一体の関係にあるという認識**が重要です。研究を深めて日々の授業を充実させること

が、子どもたちの学力・体力・心の育成につながってくるのです。

第Ⅲ期は、いよいよ保護者・地域の声を活かした“特色ある学校の完成”に向けた期間です。教育活動テーマは“チーム〇〇〇小学校”による学校づくりで、チーム力の発揮に取り組めます。私が校長を務めた小学校は、将来1,000名を超える大規模校になると予想されていたため、「超大規模校の学校づくり」と掲げました。一方で、小規模であったり、統合の可能性があったりと、学校によって状況はさまざまかと思えます。しかし、いずれにしても**チーム力を発揮できるようになること**が、総仕上げの第Ⅲ期においては、家庭と地域をつなぐ学校づくりとして重要なのです。そして、学校改革プラン7年目からは、新たなステージのⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期へと発展していくこととなります。

学校改革のための4つの要因（各校に共通すると考えられる因子）

土台は人権感覚 … 長期的展望に立った学校づくりを推進する上で、土台には**「人権感覚あふれる校風」**がなくてはなりません。人権感覚というあたたくも強固な土台があってこそ、学校づくりが正しい方向へと進んでいくからです。コロナ禍の最中であって、より一層このことを思います。

教職員の異動 … 教職員はいずれ異動となる立場ですが、それでも学校改革の流れを止めず、発展を継続させることが必要です。そのため、人が替わっても改革意識が途切れないよう**“プランという形”に残し、確実に引き継いでいくこと**が重要です。一方で、その地に住まう地域住民や保護者に対し学校改革プランを引き継いでいくことも重要です。その意味から、誰が見ても理解できるよう簡潔明瞭なプランとして策定する必要があります。

地域の人口予想 … 長期的展望に立った学校づくりには、地域の人口変化を見通すことが必要不可欠です。将来の児童数の移り変わりを見据えたプランでなければ、予期せぬ方向修正を迫られることになるからです。精度高く見通すためにも、**地元の区役所・教育担当との密な連携**が大切です。

3年単位の7年間 … 私は、「学校改革は3年単位」と常々思ってきました。小・中学校長や一般企業の方からも「改革は3年単位」とお聞きし、その確信を深めています。このような自身の経験から申し上げると、学校改革プランは**3年単位の教育活動をもとにしたトータル7年間**で立案することが、学校全体の着実な成長・発展につながると考えています。

学校グランドデザインで築く“安全地帯”

このコロナ禍で不登校やいじめが増えているとの報道を耳にするたび、社会が厳しくなればいつもその犠牲になるのは子どもであるとの思いを禁じえません。どのような時代、いかなる社会状況にあっても、学校は子どもにとっての“安全地帯”でなければならぬと痛感します。だからこそ、子ども中心の学校づくりについて

皆で知恵を出し合うことが大切であり、それを実現する方途のひとつが学校グランドデザインだと考えています。一時的な思いや単なるかけ声だけに終わらせず、具体的な形に表して、家庭と地域をつなぐ学校づくりを実現していこうではありませんか。



私がつくる 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざして、現場ではさまざまな創意工夫が行われています。「私がつくる 子どもの笑顔」では、現職の校長先生に学校づくりの考え方や具体例を紹介していただき、子どもたちを育む学校環境についての意識を深めていきます。

第8回は、大阪市立長居小学校の赤石美保子校長です。

第8回

「学びに向かう力」の育成は 児童の「主体性」を引き出すことから

《大阪市立長居小学校》 赤石 美保子 校長

1992年4月に兵庫県で教員として採用され、3年後に大阪市に転動してきました。大阪市では、教育委員会事務局や教育センターの指導主事として希少な経験をたくさんさせていただきました。また、文部科学省の業務を兼務する中で第三者評価委員もさせていただきました。これらの経験を活かしながら、児童の主体的に学びに向かう力を育むことに努めています。本校では、全ての教育活動の基盤として児童の「主体性」の育成を大切に、「チーム長居」で実践しています。



「主体性」を引き出す4つのチャレンジ

校長室前に棚とポストがあります。そこには、さまざまな学習プリントや様子を表すことばを意識させるための絵本を、週替わりや学期替わりで並べています。子どもたちは学級で出された宿題のほかに、校長室前のプリントや絵本を持って帰り、次の日には学習したプリントをポストに投函します。その1枚1枚を添削し、担任の先生を通じて返却します。子どもたちは間違い直しをして、またポストに投函します。子どもたちが自ら行動し実践する——このような経験を積み重ねることが児童の「主体性」を育てることにつながると考え、4つのチャレンジに継続して取り組んでいます。



① 漢チャレ（漢字チャレンジ）

昨年度、子どもたちは計50種類の漢字プリントにチャレンジしました。今年度は、もう一度同じプリントを繰り返すことで、間違えても粘り強く学習する力がついてきました。

② 文チャレ（文章力チャレンジ）

「ことば」や説明文、物語文の読解などを取り上げた文章問題プリントにチャレンジしました。1年生から6年生までの学習内容を系統立てて学べるようにすることで、「ことば」に興味を持つ子どもが増えました。

③ プロチャレ（プログラミングチャレンジ）

順序や分岐、関数や変数など、72の出題によるプログラミング問題プリントにチャレンジしました。論理的思考力の基礎となるような問題に、子どもたちはゲーム感覚で楽しみながら挑戦しています。

④ 読チャレ（読書チャレンジ）

昨年度の文章力チャレンジで正答率が低かった「様子を表すことば」に着目し、ストーリーに「様子を表すことば」が使われている絵本を100冊リストアップしました。今年度は、低学年には先生が読み聞かせを行い、高学年には自由に貸し出すことで、「様子を表すことば」を意識できるようにしました。子どもたちは絵本を通じ、物語の情景の中から「ことば」の深さを感じ取ったり、表現を学んだりしています。

子どもたちの感想

👧 チャレンジは、むりにやるわけでもなく、やらされるのでもなく、自分からやるために校長先生のへやの前にあるんだなと思いました。今年もチャレンジがんばっています。(3年生)

👧 私が3年生の時から、よく校長先生は、「自主性」が大切だと話してくれます。なかなかできなかったけど、6年生になって、いろいろなことにチャレンジしています。校長室前のチャレンジも、積極的に取り組んでいます。長居小学校のみんなで「主体性」をもって行動することが大事だと思っています。だからみんな協力あって、みんなで取り組んでいます。(6年生)

考えを「見える化」するための3つの掲示

これから紹介する「見える化」は、みんなの意見や考え方を目で見てわかる状態にすることです。友だちがどんな考えを持っているのか、それをどんな風にも書いているのかを知ることで、そこから子どもたちは学習し、興味関心を広げていきます。本校では、児童が主体的に学べる環境を整えることの一環として、校長室前やエントランスに3つの掲示を行っています。

👉 「校長先生の話聞いてどう思いましたか？ 教えてちょうだい」

毎週火曜日に児童朝会を行います。そこでの「校長先生の話」を聞いて、子どもたちは作文を書きます。始めは話の内容だけを書いている子どもが多く見られましたが、今では根拠を示しながら感想を書いたり、引用を用いて意見を書いたりする子どもが増えてきました。



並行して行う「言語化能力」の育成

本校では、児童の「主体性」を育てることと並行して、「言語化能力」の育成に力を入れています。「言語化能力」とは「ことば」にする力、つまり、頭の中で考えていることを「ことば」に変換し、さらにそれを相手が理解しやすい表現で伝える力のことを言います。国際社会を生き抜くために必要な理解（読解）能力や、人間関係を良好に保つためのコミュニケーション能力、多様な情報をもとに新しい価値を見出す情報対応能力は、この「言語化能力」が基盤になると考えます。本校の研究テーマである「言語化能力」の育成では、単にスキルを身につけさせるだけ

おわりに

21世紀は答えのない時代と言われています。たとえ「答えがわからない」ことであっても、果敢にチャレンジしていこうとする「主体性」のある児童を育てていくこと——それが子どもたちの輝か

👉 「どうして～するのでしょうか？」

「校長先生の話」は、完結した話ばかりではありません。子どもたちの想像を広げたり、話の内容を深めたりするために、最後に「どうしてでしょうか？」と投げかけることがあります。子どもたちは、一生懸命に話の中からその答えを導き出そうとしたり、経験やこれまでの学習から答えを導き出したりして作文します。子どもたちに考えの根拠を尋ねると、「○○で聞いたことがあったから」「○○（新聞、図書室の本など）で見たことがあったから」など、日常で得た情報をもとにした視野の広がりを感じられます。

👉 コミュニティの場としての「長居小 みんなの学習」

エントランスに、「長居小 みんなの学習」の掲示板があります。昨年度は1枚の絵画を掲げ、そこから見える事実と想像できる概念を紹介する「アート・コミュニティ」に全校で取り組みました。ここでのコミュニティは、全校児童が掲示板を通じて交流できることを示しています。ほかにも、優れた作品を掲示したり、さまざまな話題を絵や図を用いて紹介したりするなど、全校児童が情報を共有しながら楽しく学ばさっかけとなっています。



く、相手の話に興味を持って会話を楽しんだり、聞こうとしたりするために必要な表情や口調などの「非言語」の部分にも着目しています。それらは、毎年「長居の教育」としてまとめています。



左：令和3年度「要点をまとめ、自分の思いを伝える力を育てる」より
右：平成30年度～令和2年度「基礎・基本を習得し、活用する力を育む算数科の指導」より

しい未来につながると信じ、これからも「チーム長居」で挑戦していきます。